

女性における対人恐怖心性

—学校をめぐる離脱と参入の試練—

渡 部 み さ

1. はじめに

時代が進むにつれ、女性の社会的な活躍の場は拡大したが、そのことは女性の生き方が男性と全く同形になったということではない。男性に近い生き方を選ぶ女性がいる一方で、従来の家庭内の役割を引き受けつつ職業生活も行う女性も少なくない。女性のライフサイクルの研究では、女性の生き方が単一ではなくなった時代状況を反映して様々な生き方についてフォローし、研究対象としている（岡本，1994等）。かつてはひたすら従順であることが表向きには求められた時代であったのに対して、現代は常に能動的で自己主張的であればよいということでもない。今日においても、受動的あり方と能動的な自己主張（assertion）との兼ね合いは簡単な事ではなく、女性の成長過程では、受動的あり方で協調関係を配慮しつつ、徐々に自分の内に男性的・社会的な要素である「論理的であること」や「自己主張的（assertive）であること」を育ててゆく場合が多いと思われる。このような相克する課題を課される女性の成長過程の難しさに戸惑う表現の一つが、女性の対人恐怖症状ともいえるのではないだろうか。無論、現代女性においては様々な心身の不調は存在し、より華々しく、流行のように扱われる症状は他にある。しかし、対人関係に関する悩みを身体化も行動化もせず、心の苦しみとして抱え続けるあり方の一つがこの対人恐怖であると思われる。

対人恐怖とは森田（1932）が初めて文献上登場させたと言われる日本に馴染みの深い症状である。対人関係のあり方が症状の主題として出現するものであるが、症状の強さや自我の強さ等その程度が様々である。重症例においては統合失調症への移行が生じることもあり、面接継続に医療機関との連携が必要となる。一方で、対人恐怖症状を抱えながらも日常生活を破綻無く過ごす例も少なくない。一般に男子に多いとされる症状だが、近年では女子の増加が注目されている（木村，1985；小坂，1998）。これは女性の社会進出ゆえ、男性並みに対人恐怖症状が増加し、注目されるようになったと言えるのだろうが、男性の場合の発生機序や症状の経過とは異なった女性特有の対人恐怖心性もあるように思われる。それは社会進出傾向によって新たに生じたこととばかりは言えず、従来の共同体においても、女性特有の対人恐怖心性や症状は存在したものである。この点に関連して、サブクリニカルな自覚症状については女性の方が男性よりも多いとの調査（阿部，1985）もあり、自覚症状項目別の分布の違いには男女別の特徴が覗い知れる。

本稿では、このような女性の対人恐怖症状や対人恐怖心性について、女子校における筆者自身の臨床実践を基に、このような女性の成長過程を考える上で参考になるとと思われる童話を引用して、思春期・青年期における女性の成長過程に関して、それと密接に関わる母親の中年期における問題を交えて考察をする。

2. 対人恐怖とは：先行研究にみる心性・症状・発達状況

対人恐怖は欧米では少なく日本に多い症状として日本文化や伝統的住居環境の影響（近藤，1970等）も指摘されてきた。国際的にはSocial Phobia（ICD-10，1992：DSM-IV，1994ではSocial Anxiety Disorderともいう。）に分類され，近年欧米における報告も目立つようになっているが，DSM-IVのSocial Phobiaは「よく知らない人達の前」で注目を浴びる状況への恐怖や回避に焦点があてられており，対人恐怖との違いも見られる。このSocial Phobiaと対人恐怖の比較に関しては，大山（1998），西園（2001），朝倉他（2003）等に詳しい。

対人恐怖症状を顕現させる対人恐怖心性そのものに関して，笠原（1977）は平均的な青年期という発達段階で一時的に見られるものと述べている。自分の体に注意が集中し，それに対する他者の評価を極度に気にすることは，思春期における体との折り合いや青年期における社会との折り合いといった，この時期における課題と密接に関わっている心理と思われる。健康者にも見られるこのような対人恐怖心性を，永井（1994）は 1. 対人状況における行動・態度，2. 関係の自己意識，3. 内省的自己意識の3つの次元に分類し，それぞれについて，1では「打ち解けた行動の困難」と「緊張感の高まり」，2では「他者から自分への否定的評価」，「自分が他人に迷惑をかけている」，「他者との関係を計りかねている」，3では「自己の統制の弱さ」，「自己の不安定さと劣等感」を特徴として挙げてこの3分類の渾然一体となった状態が症状を形作るとしている。

山下・笠原敏彦（1985）は症状構造を，①平均者の青春期という発達段階において一時的に見られるもの，②純粋に恐怖段階にとどまるもの，③関係妄想性をはじめから帯びているもの，④前分裂病症状として，ないしは分裂病の回復期における後症状，としており，①②を軽症，③を定型，④を分裂病圏としている。

そしてこの③の定型例にみる臨床像の特徴として，a) 自分には相手に不快・緊張感を与える欠点があると感じている（対人性を持つ欠点の存在），b) その存在に関する確信はきわめて強固（確信性），c) その欠点は相手の所作や動作から直感的に感じ取られる（関係妄想性），d) この妄想体験は一定の状況内にとどまり，それ以上に発展しない（妄想体験の限局性），e) 生育歴や性格，状況要因等から症状形成が了解的に把握できる（了解性）を挙げている。

上述の分類では④に近接した③の領域の症状について，藤縄（1972）らは，加害的な確信を持つ自我障害に着目し，自己臭恐怖・自己視線恐怖等を一括して「自我漏洩症状」としており，山中（1998）は思春期の一過性を強調した「思春期限局性自己身体部位過剰意識妄想」という概念を提唱し，統合失調症への移行が考えられる重症例との区別をつけ予後の良さを強調している。

対人恐怖の病前性格については，森田（1953）は「負け惜しみの意地っ張り根性」，近藤（1970）は「自己主張的要請」と「配慮的要請」の矛盾，三好（1970）は「うぬぼれながらうぬぼれ切れてない心理」，山下（1977）は「親しさの熱望（自分のなさ）」と「自尊心，負けず嫌い」の並存，内沼（1977）は「我執」と「没我」の二面性を挙げている。これらの性格特徴の描出に共通するものに，自我の「強力性」対「無力性」の矛盾ないし相克と，こうした矛盾した二つの方向性と敏感性の兼ね備えを挙げることができるが，女性においては「無力性」「配慮的要請」に傾いて回避性人格障害に見られる対人過敏に類似している場合が多いようである。回避性人格障害に見られる対人過敏と女性の対人恐怖の類似とは，基本的対人態度が「他者との関係の円満

性の維持」にある点である。このため、少数の中間的な対人関係ではうまくやれるが、多人数の他者の面前ではうまく機能しない。大勢の他者の面前に立つには、他者の中に自己を埋没させる適応の仕方ではなく、他者に対して自己の独自性の発揮を要求されるからである。しかし、回避性人格障害においては対人恐怖の定型例に比べて他者の目による自己の評価の恐れは少なく、内的葛藤や恥の感覚の欠如が特徴的となる。大山（前出）は対人恐怖症が回避性人格障害と類似しながらも異なる点として、仮に対人場面を回避したとしても空虚感に苦しめられることを指摘している。

対人恐怖者の発達状況の特徴として、山下（1977）や鍋田（1997）は、幼児期の保護的ないしは愛情深い養育と見棄てられる不安の存在を指摘しており、受身的に周囲に順応することで学童期は高い評価を得るとしている。そして、多くの者は思春期頃に発症し、中年期には小康状態を得るとされているが、中年期の対人恐怖に関する報告もある（中村，1985）。興味深いのは男性の中年期対人恐怖症が青年期とは異なった特徴を示すのに対して、女性の中年期では、青年期との違いが少ないとの指摘である。青年期・中年期に共通の女性の特徴としては、競争原理より、愛情原理の方が支配的であることとされている（中村，前出）。長井（1991）は、他者に配慮的で過度に同調する中年女性が共同体に対し被害妄想を生じる症例を「村八分妄想」として複数報告している。彼女たちは孤立感を鋭化する形で近隣・家族に被害妄想を発展させるが、統合失調症の発症をせずに軽快していつている。次章で例に挙げた思春期・青年期に対人恐怖を訴える女性の例と、長井が論じている中年期女性の症例では、かなり類似の心性が感じられる。この思春期・青年期での問題と中年期での問題は、母娘の関係軸の両端にある繋がり深い問題として捉えることも出来る。若い女性にとっての「母親と娘の関係」、「同性同世代との関係」については、やはり女子大における臨床実践を通して高石（1997）が行っている。高石は摂食障害を含む広汎な女子大生の問題について、「ナルシズム」や「対象支配」の観点から論考しているが、本稿では対人緊張や対人恐怖の問題に焦点をあて、これらの女性の内的成長過程について考察を試みることにする。

3. 「学校」という近代以降の「共同体」における「離脱と参入の試練」

<社会性を育む「学校」という「共同体」>

対人恐怖では、保護的で愛情深い幼児の世界から離れた際の、社会と自分との関係の取り方の難しさが問題になっている。すなわち、それまでの育ちの中で培ってきた控えめで従順な自分を、社会の中での居場所を得て行くにあたって、再度形成しなおす課題が生じるのである。

現代社会において最初に接する「社会」は「学校」である場合が多い。学校自身は近代の産物であり、歴史的概念として存在している（小山，2002）。それ以前の「社会」は村や藩といった共同体であり、人々はこれらの共同体のまなざしを意識して「いえ」における子育てをしていた。明治以降の近代化の中で、これらの共同体の凝集力が減じてゆく一方で、「学校」という「共同体」が国家全体として凝集力を持ち、人々はそのまなざしを意識して子どもの躰をするようになっていった。学制施行当初から制度上の評価者は教員でありながら、思春期を迎える前後の子どもにとって学校における同級生のまなざしは世間のまなざしとして、教員のまなざし以上に意味を持っていったと思われる。知的な教育のみならず、社会性の習得についても、かつて共同体の若

者宿が担っていた機能を学校が代替していくことになったのである。

対人恐怖者が苦手とする場面として笠原（1977）は、「半見知り」、「同年輩」、「2人は良いが3人は不安」、「会話の間は魔」を挙げている。また、視線恐怖では「電車」、「不特定多数の場面」も指摘されている（吉松，1983）。思春期・青年期におけるこのような場面は、中・高・大の学校場面とその登下校の場面に当たる。中学生や高校生から抱えてきたそのような苦しみを、大学進学後学生相談の場を得て初めて語れるようになることは多い。

次節ではこのような学校場面を舞台に起こる離脱と参入の試練について、臨床実践から例を引きつつ、女子校という同性同世代集団の場における女性の成長について考えてゆくこととする。

<学生相談における対人恐怖>

校内の相談の場である学生相談では、入学と卒業の時期に相談が増加する。前者は家族や郷里といった身近な世界を離脱し、新たな学校社会に参入する危機的な時期であり、後者は幾分馴染んで来た学校社会を離脱し、まだ見知らぬ「大人社会」に参入する危機的な時期と言える。

入学時期には「学校に馴染めない」「友たちが出来ない」という相談が多い。そういった訴えが自分の体に関心が集中した形で現れるのが「自己臭恐怖」や「自己視線恐怖」と言える。匂いを気にする若い女性は少なくない。清潔さに拘る彼女たちにとって、匂いそのものは汗等の匂いとして一般的悩みの対象であり、消臭スプレー等こまめに使う様子を聞くことは多い。しかし、そういった一般的な身だしなみの範囲を超え、通常の生活が危ぶまれるほどに「臭い」とそれに対する周囲からの「非難」に拘り恐れる人たちがいる。彼女たちは「臭い」と「それへの非難」を消すための努力に心底消耗し、自身の存在まで消してしまいそうな程である。しかし実際には、どんな努力をしても、「程ほど」以上に臭いを消すのは不可能である。彼女自身が生きている匂い、生きていく臭さは彼女自身であることと分かちがたいものだからである。他の対人関係では一切自己主張しない、いわば自分臭さを出さない存在である彼女にとって、思春期以降突出してきた自らの女性性、生命力といったものには戸惑いを感じ、目を背けがたいものとして拘り続けているのではないだろうか。

また、筆者の面接していたある自己視線恐怖の女子学生は、自己視線が他者にもたらす迷惑について強い確信を持って語っていたが、次第に「この悩みの背景には対人関係の問題があり、それに向かい合ってゆかなければならない」と気づいていくこととなった。面接の中で風景構成法を施行したところ、最初の描画では「人物」として「俯きながら畑を耕す横向きの男性」が描かれたが、数回の面接後の施行では「正面を向いた少女」が描かれた。「人物」の項目のみに自己イメージが投影されるわけではないが（皆藤，1991；松井，1996）、描き手の緊張感の低減や場への安心感の醸成は伝わってくる描画変化ではあった。

自己臭恐怖や視線恐怖の訴えが面接室でなされたとき、「対人性を持つ欠点の存在（臭いや視線で他者を不快にすること）」やその「確信性」について、ひたすら耳を傾けることとなる（山中，前出）。症状の「了解性」に触れ、共感的に傾聴し続けると、症状場面への確信性・関係妄想性の揺らぎが語られ、緊張感・疲労感の緩和が本人の言葉からも本人の様子からも伝わってくるようになる。これらの症状に苦しむ人の中には、面接が進み、問題が症状から心の問題へと迫るとなると、症状が消えることを惜しむかのように、「幾分楽になった」として相談から静かに

消える人もいるが、そういった彼女たちの予後も決して悪くはない。学業に滞りは無く、卒業や就職をそれなりに決めてゆくのである。こういった予後の良さについては山中（前出）も指摘している。

症状が持つ意味には多様性がある（桑原，2001）。苦しみや異物としての症状は、症状の相対化や対象化をすることで扱いやすく楽になる面もあるが、自分らしさの砦としての症状は、消去すればよいだけのものではないと思われる。河合（1995）は、「症状を解消することにも、解消せずにいることにも意味がある」としており、実際、ひたすら他者に融和的な彼女たちにとって症状は唯一の「自分らしさ」＝「我」であるとも言える。「幾分楽になった」ところで面接から離れる人たちは、その「自分らしさ」としての症状を少し残して現実と取り組んでいくことを選択していったのかもしれない。

また、日頃適応に問題がないながら、ゼミ発表等人前に立つ場面での恐怖感を訴える学生も少なくない。その恐怖の背景には、群集・聴衆への不信感が強くある。この不信感は幼児期からの母子関係の微細な問題と、中学時代の失敗体験にその萌芽が求められることが多かった。そのような彼女たちも相談室に通いながら、思春期の只中とは異なる安定した友人関係を築き直し、人前での発表経験を成功体験として重ねる中で、これらの不安感を払拭してゆくことが出来た。

上述のような例は、思春期以降抱えてきた苦しさとして入学後に語られることが多い。一方で卒業が意識される時期では、入学時における学校社会への参入では目立った問題は見えなかった学生が就職を「しなければならない」ことで困惑・混乱する場合が少なくない。大人しく、目立たずに過ごし得たそれまでの生活から、他人とは違う自分を前に押し出さなければならない就職活動・大人社会への参入は、生き方の大転換が必要とされる。それまでの家庭や友人グループでは適応しやすかった自己主張しないあり方が否定され、エントリーし、自己PRし、人前に出る姿勢が求められると、一挙に対人緊張・対人不安が高まってしまうのである。女子校は荒々しい前思春期・思春期の男子生徒との接触を避けられる場であると同時に、推薦入試制度が整い、筆記試験等の競争や試しを経験することなく進学できる可能性の高い場所でもある。7年～10年という長い年月を、大人しくしていれば特に波風の立たない生活を送ることが出来る。気を使う相手は家においては母親であり、学校においてはグループのメンバー、とりわけリーダー格の友だちである。そのような学生が、一転して自己主張（assertion）を強いられると感じれば、強い不安に襲われることも納得できる。彼女たちはもはや人の中に紛れていられない卒業という時間切れを目前に、学内の相談面接を足がかりにして、不慣れな自己主張を試みるのである。最初に成される自己主張は、「私は違う」「私は嫌」と否定することであり、自分のペースで自分の進路を選び取る態勢を整えていくこととなる。

ここで例示したのは、具体的な異性との関わりは少なく、性的逸脱等ない、ごく真面目な女子学生たちである。女子校の同性同世代との関わりの中で幼児的世界から緩やかに男性的・父性的社会への移行を目指している只中といった状態である。親たちが安心のために提供する女子校という場を、娘たちも抗うことなく受け入れ、そこに潜むことでなんとか息をついていくのである。彼女たちは他者に対して遠慮がちで、自分を主張しない。一見して適応的で社会性もあるように見える。友人関係を重んじ護送船団のように身を守っている。周囲の人間には彼女たちがそのような苦しみを抱えると推察することは難しいと思われる。実際、彼女たちは誰にも話さず密かに

相談室を訪れる。親との関係は普通以上に密着しており、思春期以前から変わらない。親から精神的・物理的に距離を置く願望も持ちながら、親への気兼ねと自分自身への自信の無さから、密着した関係は継続している。このような思春期・青年期の娘たちの母子関係にある密着感は、母親の側からのしがみつきの優位である。彼女たちの母親は、貪り尽すような、激しく否定的な母親ではなく、外見的にも本人たちの意識の上でも、より穏やかで友好的な母親であり、ときに傷つきやすく見えるが故に（北山，1985：高石，前出）彼女たちは拒否や反抗をすることが出来ないのである。このような彼女たちについて、次章ではひとつの童話を通して理解を深めることとする。

4. 物語に見る「離脱と参入の試練」

童話は口承で語り継がれてきたものゆえ、本質だけが残り人々の心の奥深くにあるイメージを内包している（山，1993）。河合（1982）は日本の童話に見る女性主人公たちのあり方を、男女を含めた日本人に共通する心性として論じている。そして、これらの物語を一人の女性の生き方として捉えることも意味深いとしている。織田（1993）は自験例と民話との照らし合わせにより、現代女性の生き方について論じている。民話・童話・神話の中には類似のプロットが多く見られるが、そのプロットのバリエーションに傷つきの深さや立ち向かう問題の大きさ・種類が設定されており、それにまつわる人間の内的成長過程のある段階が描かれているように思われる。本章ではそういった観点から、「女性の対人恐怖心性と社会との関わり」という本稿のテーマに適すると思われる物語としてグリム童話の『ガチョウ番のおんな』（付録参照）を選んだ。そして類似の「女性の離脱と参入に関する結婚譚」（表1参照）と比較検討しつつ、学校における心理面で関わった女性たちの心性と抱える課題について考察する。

< 母性の質 >

『ガチョウ番のおんな』における母女王は優しく、愛情をかけて姫を育てる。その王国には既に父王がない。父性が欠如した母性の優しさにのみ育てられた姫は、母女王の血の3滴ついたハンカチを持たされて旅立たねばならない。そのハンカチは姫にとって「母による守り」を象徴しているのであるが、あまりにも軽く、失い易いものである。この軽さや失い易さは父性の欠如状態と関係すると思われるが、母である女王自身についてだけ言えば、母女王の優しさ、娘へのしがみつきの少なさ、健康さとも言える。これに比べて、『鉢かづき』（表1③）が母からかぶせられた、鉢の重さ、異様さは大きな違いである。また、『手なし娘』（表1④、註参照）が被った、手を切り落とされるという厳しい試練は、『ガチョウ番のおんな』の試練とは相当に質の異なるものといえる。『手なし娘』におけるような深い傷つきの救済には宗教性が欠かせないテーマとして生じてくる（von Franz, M.-L., 1974）。

さらに結婚譚の中でも偽の花嫁というプロットが類似している『マレーン姫』（表1-⑥、表2）では、母は既に亡くなり、母性の欠如した王国で厳しい父王の元で育てられている。父王の示した結婚話を拒否した姫は父の怒りを買って、腰元とともに光の射さない暗い塔の中に7年間も幽閉される。これは深い暗い胎内体験のやり直しとすることができ、これもまた『ガチョウ番のおんな』で示された母性のあり方、母性からの出立、弱さの克服とは違うレベルでの問題提示を感じ

させる。幼児期の守りのなかった人の傷つき体験、生まれ直しというテーマがこの童話には当てはまると思われる。武野（1994）はこの『マレーン姫』における7年もの塔への幽閉や塔を脱出後の周辺の荒廃を“分裂病(統合失調症)”性の鬱状態に擬えている。

『マレーン姫』に比べると、『ガチョウ番のおんな』の場合では、程良い母親である女王の元で主人公の姫は必要な幼児的世界をある程度享受したのではないだろうか。一方で、父が亡くなり、母によってのみ娘が育てられたというプロットは、父が入り込む隙がないほどの母娘の密着した世界が想像される。これはギリシア神話における『デメテルとペルセポネー』（表1-①）の関係と類似している。しかし、デメテルとペルセポネーの密着した関係は、地下世界のハデスによる父権的ウロボロス（Neumann, E., 1952）によって強引に引き裂かれたのに対して、『ガチョウ番のおんな』における母は母娘の密着の世界からお守りのハンカチとともに娘を送り出すのである。このような出立をすることで主人公の姫は、マレーン姫ともペルセポネーとも異なった質の困難に直面するとも言える。すなわち、その慣れ親しんだ、甘い世界を離れるという辛さと戸惑いに耐えねばならず、さらには新たな「場」において自分で自分を戦い取るという厳しさとも直面しなければならないのである。この物語において主人公の姫に名がなく、「姫」とのみ記されているのも象徴的とも思われる。

< 慣れ親しんだ世界からの離脱と新たな世界への参入 >

老いた母親に愛情深く育てられた姫はいわば「自分が出せない」「控えめな女性」である。その彼女が嫁入りの旅の途中で受けた「自分自身の立場をお供の女性に乗っ取られてしまう」という災難にあって、母親の庇護のない場で、どのように自分自身であることを主張し取り戻すか、という試練の過程についてこの童話は描いている。慣れ親しんだ「幼児世界」を離脱すると、それまでの美德であった「控えめな態度」は美德として彼女を守りはしない。むしろ陥穽となる。お供の者が反旗を翻して彼女の立場を横取りする危機に際しても、彼女は本来の権利を強く主張することは出来ない。彼女が彼女であることを簡単に譲り渡してしまうのである。その後、旅の間も嫁ぎ先の王国に到着しても彼女は受動的に耐え忍ぶ。このような受動的な耐え忍ぶ時期の大切さについて河合（1982）や織田（1993）が指摘している。しかし、この受動的な時期はそのまま終わるものではなく、次の危機的場面における主人公の能動的行為によって破られ、そして幸福な結末につながるのである。おそらくこの主人公の成長には、最初から自己主張的で能動的なのではなく、そしてまた、受動的なまま終わるのではないということが重要な意味を持つと思われる（図. 1 参照）。これに比べて、『ツグミ髯の王さま』（表1-⑤）では最初の場面の拒絶的な自己主張が姫の試練に結びつき、その後の受動的耐え忍びが幸福な結末をもたらしており、『ガチョウ番のおんな』や『手なし娘』等とは逆の展開とも言える。また、『アモールとプシュケー』（表1-②）ではプシュケーは自らを死の結婚に捧げるという受動的な試練に始まり、無知のままの幸福な生活を受動的に享受した後、姉たちの唆しにより能動的にアモールの真の姿を知ろうとする。その結果アモールと離れ、根気のいる課題を終わるあてがなくとも耐え忍んでゆく。女性の成熟・成長にとって、受動的な試練の耐え忍びと自己主張・能動性の双方が重要な要因と思われる。このように、同じモチーフでもプロットの相違によって能動的行為と受動的耐え忍びの時期が異なるのであるが、本稿で取り上げた『ガチョウ番のおんな』における、このような幼児

期を過ごした、このような自我を持つ主人公の姫は、母女王の国外ではそれまで育んだ持ち前の「控えめな態度」ゆえに悪意を持った腰元に「なされるがまま」苦勞し、言いつけられたままに口を閉ざし、ガチョウ番としての労働にも受動的に耐え忍んだ後、新しい王国の父王の勧めで、ストーブの中で自分を主張することになる。

幼児的世界離脱後に生じる「試練」を主人公の姫は受動的に耐え忍んだ後、時を選んだ自己主張をすることで生き抜いた。恐らくこの一定期間の受動的な耐え忍ぶ生活は、姫が幼児的な世界の住人から大人の女性として自分自身を作り変えるためには必要な時間であったと思われる。この期間における「秘密」は大切なものであり、密やかに成長が保証され、内的なエネルギーが蓄えられ、来るべき時における能動的行為に備えたのだと思われる。「積極的心持ちにおける受動」(Neimann, E., 前出：河合, 前出)は成長に欠かせない要素と考えられる。

< 内なる男性性を育てること >

このような受動的耐え忍びの後、能動的自己主張が必要な時がやってくる。瞬時に「私であること」を主張できるか否かが取り上げた物語では幸福な結末の決め手となっているようである。

この点に関して、Hannah, B (2000)はこの童話の姫に見るような「自分自身であること」を獲得してゆく女性の成長過程には内なる男性性との接触が必要であると述べている。

思春期以降、同性同世代との関わりでは、chumship (Sullivan, H.S., 1953)と言われるような親友との密着な2者関係が大切であるが、同性同世代の中で培われてゆくものは母性的・女性的側面ばかりではない。内なる男性性の育みもまた、なされてゆくと思われる。自らと相容れない影とも言える同性の存在との確執や、そういった相手から突きつけられる「試練」に自分なりに取り組んでゆくことは、その後の人生において実際の男性と関わり、その人を通して男性性を取り入れてゆくことに先んじて、自らの内なる男性性を鍛える仕事と思われる。

また、物語では話せる馬ファラダが苦境にある姫を朝夕慰め励まし続けた。マレーン姫では常に傍に居て慰め励ましたのが女性の腰元であり、それは姫が育ちの中で欠けていて補う必要があった母性的存在であったのに対し、このファラダの存在は、父性の乏しい環境に育った姫の未熟な形での内なる男性性であり、外界における自分を確かにしてゆく導き手でもあったと思われる。

< 現代女性における『ガチョウ番のおんな』の試練 >

慣れ親しんだ「場」からの離脱と新たに参入する「場」での試練というものはこの童話にとどまらず、現代の女性たちの成長においても生じていると思われる。

同性同世代の集う学校における苦しさは、『ガチョウ番のおんな』で言えば、まだ幸福な結末には遠い段階で主人公の姫がガチョウ番としての労働の中で少しずつ自分の力をつけてゆくところにあたりともいえる。母親の庇護厚い幼児的世界から切り離され、力のある同性に圧倒され口を噤み、不慣れな労働を積み重ねていったこの時期は、姫にとって自我の力を作り直し、その後の「ここ一番」の場面での力を蓄えていった時期であった。これは、現代の女性たちがそれまでの母親と密接な関係の中で育った幼児的世界から離れ、同性同世代の社会に身を置き、そこで味わう試練と重なる面が大きいと感じられる。

学校を巡る離脱と参入は家庭的・幼児的世界と社会とを挟んで入れ子状になっており、入学で

はソトとして試練となった学校が、卒業においてはウチに近い場として、よりソトへの参入の為の中間領域として機能し得る。この場合、生徒・学生は急激に社会へ放出される衝撃を、学校という中間領域の存在によって弱めることができるのである。無論これは、各人の様々な特性と自我の強さや状態によってその存在の意味は異なってくる。社会への出立に「学校」は緩衝帯ともなり、トラウマの繰り返しにもなり得るのである。

このような位置づけにある学校場面において、「相談」することの意味は何であろうか。先述したように、ある一定の自我の強さを持った彼女たちは、ある程度の危機を乗り越えると、症状をいとおしむように相談場面を去りながら、現実適応を示してゆく。外的な問題を顕著には見せず、予後の良い彼女たちにとって、「相談」の意味が明確には見えにくいかも知れない。しかし、提示した物語では、姫が朝に夕にファラダと密かに語らうことを心の慰みにした。そして又、王の勧めによりストーブの中で密かに自らの身の上を告白したことが姫の生き残りを支え、幸福な結末へ導いた。同様に学校場面においても、厳しい現実の傍にある「守られた場」で密かに語らい密かに告白することが、彼女たちの「積極的心持ちでの受動」の積み重ねと、「ここ一番」の自己主張 (assertion) を支えてゆくのではないかと考えられる。

5. おわりに

本稿では、女性の成長において、受動的・協調的であることと、能動的・自己主張的であることを程よく身につけてゆく困難のひとつの現れを対人恐怖心性として捉え、学校にまつわる離脱と参入の試練として女子校の臨床実践を示し考察した。さらに、このような心性を深く理解するために童話『ガチョウ番のおんな』の素材に重ね、控えめな「自分が出せない」女性が、適切な時に自己主張し、「自分であること」を勝ち取ってゆく過程には受動的に耐え忍ぶ時期があり、その時期に内なる男性性を育ててゆくことを見ていった。

対人恐怖心性は、もっと深刻な様々な問題のある現代においては古風で温和な心性や症状と言えるが、女性が女性らしいやり方で社会と折り合い自分らしく生きる上で今後も女性の社会生活における中核的なテーマとなるとと思われる。

また、このような女性では幼児的世界において母親との密着した関係があり、母親の側における類似の心性も覗かれた。本稿では娘の側の成長過程を中心に論考を行ったが、母親の視点からまた稿を改めて論じることとしたい。

引用した童話・民話・神話

- 『デメーテルとペルセポネー』 アポドーロス 1953 『ギリシア神話』岩波書店、36-37
 『アモールとプシュケー』 アプレイウス 1956 『黄金のろば (上)』呉 茂一訳 岩波文庫、125-182
 『鉢かづき』 市古貞次 校注 1985 『御伽草子 (上)』岩波文庫、55~86
 『手なし娘』 関敬吾 1956 『こぶとり爺さん・かちかち山-日本の昔ばなし (I)』岩波文庫、25-31
 『つぐみの髻の王さま』 KHM 52 金田鬼一 訳1979 『完訳グリム童話集 (第二巻)』岩波書店、120-129
 『マレーン姫』 KHM 198 金田鬼一 訳1979 『完訳グリム童話集 (第五巻)』岩波書店、195-208
 『ガチョウ番のおんな』 KHM 89 金田鬼一 訳 1979 『完訳グリム童話集 (第三巻)』岩波書店、92-106
 (註)『手なし娘』は日本民話からの引用としたが、グリム童話等にも同様の話があり、von Franz, M. - L. はグリム童話について解釈している。

文献

- American Psychiatric Association (1994) : Diagnostic and Statistical Mental Disorders, Fourth Edition(DSM-IV). APA, Washington, D. C. 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (訳) (1995) DS M-IV 精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院
- 阿部和彦 (1985) : 小児期および青年期における発達と対人恐怖的症状. 高橋 徹 (編) 精神科MOOK 12 金原出版, 70-75
- 朝倉 聡・傳田健三・小山 司 (2003) : 社会恐怖 (社会不安障害) の診断-Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) の有用性を含めて-. 精神科治療学, 18, 263-269
- 藤縄 昭 (1972) : 自我漏洩症状について. 土井健朗 (編) 精神病と神経症. 医学書院
- Hannah, B. (2000) : The Problem of Contact with Animus. Inner Journey. Edited by Franz, D, L. Inner City Books, 105-142
- 皆藤 章 (1991) : 風景構成法における風景の中の自己位置. 心理臨床学研究, 18 (3), 66-74
- 笠原 嘉 (1977) : 青年期-精神病理学から- 中央公論社
- 河合隼雄 (1982) : 昔話と日本人の心 岩波書店
- 河合隼雄 (1995) : ユング心理学と宗教 岩波書店
- 木村 駿 (1985) : 対人恐怖論-行動生活空間と対人恐怖. 高橋 徹 (編) 精神科MOOK12 金原出版, 117-126
- 北山 修 (1982) : 悲劇の発生論 金剛出版
- 近藤章久 (1970) : 対人恐怖について-森田を機転として-. 精神医学, 12, 382-388
- 小坂和子 (1998) : 重症視線恐怖の心理臨床. 山中康裕・河合俊雄 (編) 境界例・重症例の心理臨床 金子書房, 172-186
- 小山静子 (2002) : 子どもたちの近代-学校教育と家庭教育 吉川弘文館
- 桑原知子 (2001) : 症状のもつ「意味」について. 河合隼雄 (編) 心理療法と因果的思考 岩波書店, 75-121
- 松井律子 (1996) : 風景構成法の読み方. 山中康裕 (編) 風景構成法-その後の発展. 岩崎学術出版社, 27-42
- 森田正馬 (1932) : 赤面恐怖症 (又は対人恐怖症) と其療法. 神経質, 3, 172
- 三好郁男 (1970) : 対人恐怖について-「うぬばれ」の精神病理. 精神医学, 12, 382-388
- 鍋田恭孝 (1997) : 対人恐怖・醜貌恐怖 金剛出版
- 長井真理 (1991) : 内省の構造 岩波書店
- 永井 徹 (1994) : 対人恐怖の心理-対人関係の悩みの分析 サイエンス社
- 中村勇一郎 (1985) : 中年期の対人恐怖症. 高橋 徹 (編) 精神科MOOK12 金原出版, 11-19
- Neumann, E. (1952) : Zur Psychologie des Weiblichen. Rascher, Zurich. 松代洋一・鎌田輝男 (訳) (1980) 女性の深層 紀伊国屋書店
- 西園昌久 (2001) : DSMと文化的問題. 精神療法, 27 (5), 480-489
- 織田尚生 (1993) : 昔話と夢分析-自分を生きる女性たち 創元社
- 岡本祐子 (1994) : 女性のためのライフサイクル心理学1章・2章・8章. 岡本祐子・松下美知子 (編) 福村出版
- 大山泰宏 (1998) : 重症対人恐怖の心理療法. 山中康裕・河合俊雄 (編) 境界例・重症例の心理臨床 金子書房, 186-198
- Sullivan, H. S. (1953) : THE INTERPERSONAL THEORY OF PSYCHIATRY. W. W. Norton&Company. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏑 幹八郎 (訳) (1990) 精神医学は対人関係論である みすず書房
- 高石浩一 (1997) : 母を支える娘たち-ナルシズムとマゾヒズムの対象支配 日本評論社
- 武野俊弥 (1994) : 分裂病の神話-ユング心理学から見た分裂病の世界 新曜社

- 内沼幸雄 (1977) : 対人恐怖の人間学 弘文社
- von Franz, M. - L. (1974) : Problems of the Feminine in Fairy Tales 秋山さと子・野村美紀子 (訳) (1979) メルヘンと女性心理 海鳴社
- World Health Organization (1992) : The ICD-10 Classification of Mental and Behavioral Disorders. Clinical and diagnostic guidelines. Geneva, WHO. 融道男・中根充文・小宮山 実 (監訳) (1993) ICD精神及び行動の障害, 医学書院
- 山 愛美 (1993) : メルヘンにみる心理学. 山 祐嗣・山 愛美著 行動と深層の心理学 学術図書出版, 152-177
- 山中康裕 (1998) : 重症神経症の心理療法. 山中康裕・河合俊雄 (編) 境界例・重症例の心理臨床 金子書房, 165-172
- 山下 格 (1977) : 対人恐怖 金原出版
- 山下格・笠原敏彦 (1985) : 対人恐怖の概念と臨床像. 精神科MOOK12 金原出版, 11-19
- 吉松和也 (1983) : 対人恐怖の心理学. 青年心理, 41, 6-16

付録 『ガチョウ番のおんな』のあらすじ

昔々ある王国の女王の姫がお嫁入りすることになった。姫の父である王は亡っており、母である女王が大切に姫を育ててきた。女王は姫に立派な嫁入り仕度をするともに、腰元を一人ついて行かせた。姫の乗る馬は話せる馬でファラダといった。母女王は自分の指を針で突いて血を3滴ハンカチにつけ、道中のお守りとして姫に持たせた。旅の途中、喉が渴いた姫は腰元に水を汲んでくるように言うが、腰元はそれを拒否し姫が自分で川べりに這いつくばって飲むように言った。姫はそうにして水を飲んだ。2度目に喉が渴いた時、やはり腰元に同じ様に拒否され、川べりに這いつくばった際、姫は母女王から貰ったハンカチを落としてしまった。それを見ていた腰元は、姫に服も馬も全て取り替えるように命じた。抵抗もせずこれに従った姫は、更に「この出来事を口外しない」と太陽の下で誓わせられた。姫と腰元が入れ替わったまま嫁ぎ先の王国に到着し、姫に成りすました腰元は本物の姫をこき使うように頼む。姫はガチョウ番として暮らしてゆくことになった。腰元は話せる馬が真実を話すことを恐れ、馬を殺すように言うが、姫は馬の処分を命じられた者に頼み込んで馬の首を王国の門にくくりつけてもらった。毎朝毎夕、ガチョウを連れて門をくぐる姫にファラダは「こんなことを女王様知ったらどんなにお嘆きになることでしょう」と声をかけるのであった。野原に行くと姫はガチョウを遊ばせながら髪を解いて梳った。姫とともにガチョウの世話をしていた少年は姫の金色の髪を盗み取ろうとするが風に邪魔をされうまく取れなかった。苛立った少年は姫と馬の様子や髪を梳くときの様子を王子の父である王に告げ口をした。ガチョウ番をしている少女の素性に疑問を持っていた王は、姫を呼び出して真実を問いただしたが、口外しないと誓わせられた姫は言うことが出来なかった。そこで王は、姫にストーブの中に入って真実を話すように言った。姫はストーブの中に入るとこれまでの顛末を話した。王はストーブの煙突からその一部始終を聞いた。結婚の祝宴の日、王は姫に立派な服を着せ会場に座らせておいた。姫に成りすましていた腰元に王はさりげなく「～のような行いをしたものにはどのような罰が適当か？」と問うと、腰元は「鋭いとげのついた樽に入れ町中を転がす」と答えた。王は「それはお前に対する罰」と言い渡し、腰元はその罰を受けて死に、姫は王子と結婚することになった。

(臨床実践指導学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2006年9月8日、受理2006年12月7日)

渡部：女性における対人恐怖心性

表. 1 女性主人公の結婚譚のプロット比較

	主人公	母	母の行為	母以外の女性	母以外の女性の行為	父	父の行為	試験1	試験2	夫	助ける男性	幸福な結末の契機	最後の決め手
ギリシア神話	① ペルセポネー	デメーテル	略奪された娘を探し続ける	(イアムペー)	(母神を笑わせる)	ゼウス	略奪を唆す。妥協案提出	突然の略奪婚	死の国の食物を食べてしまう	ハデス	父ゼウス(完全な救済ではなく、仲介)	完全なハッピーエンドではない。	母神デメーテルの季節に及ぼす力
	② プシュケ	生存	父と共に娘を結婚に送り出す	姉2人	アモールを見るよう唆す	生存	神託に従い娘を結婚させる	怪物との死の結婚	夫と再会する為の試験	アモール	夫	3つの課題を何としてもやり遂げようとしたこと	受動的仕事、夫への愛
日本民話	③ 鉢かづき	死去	鉢をかぶせる	継母	父を唆して娘を追放	生存	娘を追放	実家を追われ放浪	嫁比べ	宰相の君	夫	決意の服け落ち	鉢中の宝物、姫の器量
	④ 手なし娘	死去		継母	父を唆し娘を追放。手紙をすり替え再度娘を放逐させる。	生存	娘の手を切り追放	手を切られて放浪	子供連れの放浪	「立派な若者」	夫	井戸に落ちた子供を助けようとした	子供を助けたい思い、折り
グリム童話	⑤ つぐみの薔の王さま	話に出てこない		話に出てこない		生存	乞食に娘を嫁がせる	乞食の妻としての労働	お城での下働き	乞食=つぐみ薔の王さま	夫	労働の中で姫が高橋を後悔したとこと	全てはつぐみ薔の王の芝居、姫は高橋を後悔
	⑥ マレーン姫	死去		腰元	塔の幽閉とその後の放浪を共に過ごす	生存、厳しい	娘の結婚に反対し、塔に幽閉	7年の塔での幽閉	開放後の放浪、下働き	王子	王子	イラクサ	結婚式で受けた金の首飾り
	⑦ ガチョウ番のおんな	生存、優しい	ハンカチに血を3滴つけ持たせる	腰元	立場を替えさせ姫になりますます	死去		地位の剥奪	ガチョウ番としての労働	王子	王子の父王	話せる馬、ファラダ、金髪	ストーブでの告白

表. 2 グリム童話『ガチョウ番のおんな』と『マレーン姫』
姫の結婚における花嫁の入れ替わりのテーマ

	ガチョウ番のおんな	マレーン姫
母	生存、やさしい、血3滴のハンカチ	死去
結婚まで	結婚のための旅、地位の剥奪、ガチョウ番の労働	結婚に反対され7年間幽閉された後放浪、下女となる。
好転のきっかけ	ファラダと言う話せる馬、金の髪	イラクサ
最後の決め手	王が煙突で聞いているストーブ	王子にもらった金の首飾り
腰元	裏切り、偽の姫に成りすまし、あざとく、賢い	7年間の幽閉とその後の放浪をともに過ごし、姫の嘆きに寄り添う。姫自身が下女になると話から消える。
姫の試験1	腰元の冷たい態度→素直に応じる	7年間の幽閉後も開放されず、腰元と協力して脱出する。
姫の試験2	ファラダ殺害さる→首を門にかけてもらう	あてのない放浪生活の後に下女となる。
苦難をいかに耐えたか	ファラダという話せる馬の首の慰め	腰元とイラクサ
嘘を見抜く人	王子の父親である王	王子自身
危機をいかに逃れたか	王子の父王の見抜き	姫の叫び声と王子の聞き及び
結果の共通性	王子と姫の結婚・偽の姫の処刑	
過程の共通性	苦難、厳しい労働、味方となる人、嘘を見抜く人、いざと言うときの姫自身の機転と勇気	

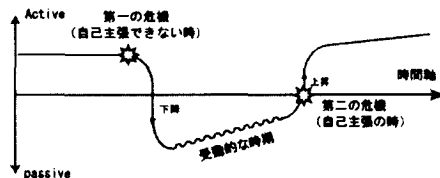


図1 “ガチョウ番のおんな”にみる試験とその後の幸福の結末

Social Phobia in Women: Emotional Difficulties Associated with Entering and Graduating from a School

WATANABE Misa

We describe social phobia in women, which prevents women from developing both "passive and cooperative" and "active and assertive" behaviors. We describe cases of psychotherapeutic practice in all-female schools, where the subjects were unable to assert themselves because they tended to sympathize with others. They experience particular difficulties when they enter school and when they graduate from school. Moving from a very protective world to a new grown-up one is difficult for them. To explain these difficulties, we refer to "The Goose Girl," which is one of Grimm's fairy tales. In this tale a very humble princess who hated to assert herself with her maid was turned into a goose girl. But she never forgot that she was really a princess. Because she had endured such a tribulation, she eventually developed an ability to assert herself appropriately, and she was able to marry a prince. This story suggests how a woman can develop self-awareness and self-assertion.